

国

語

(
解答番号

1

}

36

(

第1問

以下は、十八世紀末から十九世紀にかけて、幕府の教学制度が整備され、さらにこれをモデルとした学問奨励策が各藩に普及していくに伴って、漢文を読み書きする行為が士族階級を主な担い手として日本全国に広まったことを述べた後に続く文章である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。(設問の都合で本文の段落に[1]～[20]の番号を付してある。)

(配点 50)

[1] 漢文学習の入り口は素読^{そどく}です。初学者はまず『論語』や『孝経』^(注1)などを訓点に従ってただ「ボウヨ」^(ア)みする素読^{そどく}を叩きこまれま

した。漢籍を訓読するというのは、一種の翻訳、つまり解釈することですから、解釈の標準が定まっていないうと、訓読もまちになってしまいます。そうすると、読み方、つまり素読を統一することはできなくなります。「素読吟味」という試験は素読の正確さを問うものでしたから、素読、すなわち訓読はおおまかにせよ統一されていることが前提となりましたし、さらにその前提として、解釈の統一が必要でした。つまり、解釈の統一は、カリキュラムとしての素読の普及と一体のものであったと言えるのです。やや極端な言い方ですが、異学^(注2)の禁があればこそ、素読の声は全国津々浦々に響くことになったのです。

[2] このように歴史の流れを理解すれば、十九世紀以降の日本において、漢文が公^{こう}に認^い知^ちされた素養^{そよう}であったということも、納得しやすいのではないでしょうか。

[3] さて、こうした歴史的な環境の中で、漢文は広く学ばれるようになったのですが、多くの人々は儒者^(注3)になるために経書^{けいしょ}を学んだではありませんし、漢詩人になるために漢籍をひもといたわけではありませんでした。そうした専門家になるためでなく、いわば基礎学問としての漢学を修めたのです。もちろん、体制を支える教学として、身分秩序を重んじる朱子学が用いられたという側面を無視することはできません。しかし、現実^{げんじ}に即して見れば、漢学は知的世界への入り口として機能しました。訓読を叩きこまれ、大量の漢籍に親しむことで、彼らは自身の知的世界を形成していったのです。

[4] となると、その過程で、ある特定の思考や感覚の型が形成されていったことにも、注意を向ける必要があります。といつても、忠や孝に代表される儒教道徳が漢文学習によって身についたと言いたいのではありません。そうした側面がないとは言え

ないのですが、通俗的な道徳を説く書物なら、漢籍を待たずとも、巷に溢れていました。何も漢文を学ばなければ身につかないものでもなかったのです。

5 A もう少し広く考えてみましょう。

6 そもそも中国古典文は、特定の地域の特定の階層の人々によって担われた書きことばとして始まりました。逆に言えば、その書きことばによって構成される世界に参入することが、すなわちその階層に属することになるわけです。どんなことばについてそうですが、**B** 人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します。前漢から魏晉にかけて、その書きことばの世界は古典世界としてのシステムを整えていき、高度なりテラシー（読み書き能力）によって社会に地位を（イ）しめる階層が、その世界を支えました。それが、士人もしくは士大夫と呼ばれる人々です。

7 『論語』一つを取ってみても、そこで語られるのは人としての生き方であるように見えて、士としての生き方です。「学んで時に習う」と始められるように、それは「学ぶ階層のために書かれています。儒家ばかりではありません。（注4）無為自然を説く道家にしても、知の世界の住人であればこそ、無為自然を説くのです。乱暴な言い方ですが、農民や商人に向かって（注5）隠逸を説くのではないのです。」

8 思想でなく文学にしても、同じことが言えます。たしかに、中国最古の詩集である『詩経』（注6）には民歌に類するものが含まれていますが、その注釈や編纂が士人の手になるものである以上、統治のために民情を知るといふ視線はすでに定まっています。まして、魏晉以降、士人が自らの志や情を託しうるものとして詩を捉え、ついには詩作が彼らの生を構成するほとんど不可欠の要素になったことを見れば、唐代以降の科挙による詩作の制度化を待たずとも、古典詩はすでに士人のものだったことは、あきらかです。

9 こういう観点からすれば、古典詩文の能力を問う科挙は、士大夫を制度的に再生産するシステムであつたのみならず、士大夫の思考や感覚の型——とりあえずこれをエトスと呼ぶことにします——の継承をも保証するシステムだったことになりました。

10 日本の近世社会における漢文の普及もまた、士人的エトスもしくは士人意識——その中身については後で述べます——への志向を用意しました。漢文をうまく読み、うまく書くには、字面だけを追って真似ても限界があります。その士人としての意識に同化してこそ、まるで唐代の名家韓愈（かんゆ）が乗り移ったかのような文章が書けるというわけです。あるいは、彼らの詩文を真似て書いているうちに、心の構えがそうなるってしまうと言ってもよいでしょう。文体はたんに文体に止まるものではないのです。

11 そういうふうにして、古典文の世界に自らを馴染なじませていくこと自体は、中国でも日本でもそれほどの違いがあるわけではありません。ただ、誰がどのようにして、というところには注意が必要です。もう一度、近世日本に戻って考えてみましょう。

12 繰り返しになりますが、日本における近世後期の漢文学習の担い手は士族階級でした。となると、中国の士大夫と日本の武士が漢文を介してどのように繋つながるのか、見ておく必要があります。

13 グン（ウ）コウを競う中世までの武士とは異なり、近世幕藩体制下における士族はすでに統治を維持するための吏僚（注7）であつて、中国の士大夫階級と類似したポジションにありました。その意味では、士人意識には同化しやすいところがあります。一方、中国の士大夫があくまで文によつて立つことでアイデンティティを確保していたのに対し、武士は武から外れることは許されません。抜かなくても刀は要るのが太平の武士です。文と武、それは越えがたい対立のように見えます。

14 しかしそれも、武を文に対立するものとしてでなく、忠の現れと見なしていくことで、平時における自己確認もヨウ（エ）イになります。刀は、武勇でなく忠義の象徴となるのです。これは、武への価値づけの転換であると同時に、そうした武に支えられてこそ文であるという意識が生まれる（オ）「ケイキ」にもなります。

15 やや誇張して言えば、近世後期の武士にとつての文武両道なるものは、行政能力が文、忠義の心が武ということなのです。武芸の鍛錬も、総じて精神修養に眼目があります。水戸藩（注8）の藩校弘道館を始め、全国各地の藩校が文武両道を標榜したことは、こうした脈絡の中で捉えてこそ意味があるでしょう。たとえば、幕末の儒者佐藤一斎（さいしゅういつさい）の『言志晩録』にはこんな一節があり

ます。

刀槩之技、懷怯心者衄、頼勇氣者敗。必也泯勇怯於一靜、忘勝負於一動、「…」如是者勝矣。心学亦不外於此。

〔刀槩の技〔劍術〕は、怯心〔臆病な心〕を懷く者は衄し〔負け〕、勇氣に頼る者は敗る。必ずや勇怯を一靜に泯し〔消し〕、勝負を一動に忘れ、「…」是くの如き者は勝つ。心学も亦た此れに外ならず。〕

16 臆病も勇猛も勝負も超越してこそ、勝つことができる。武芸はすでに技術でなく精神が左右するものになっています。だからこそ、精神修養の学である「心学」が、武芸の鍛錬になぞらえられているのです。注意したいのは、武芸を心学に喩えているのではないことです。その逆です。心学を武芸の鍛錬によって喩えるほどに、武芸は精神の領域に属する行為となっていたというわけです。

17 そして寛政以降の教化政策によって、学問は士族が身を立てるために必須の要件となりました。政治との通路は武芸ではなく学問によつて開かれたのです。もちろん「学問吟味」という名で始まった試験は、中国の科挙制度のような大規模かつ組織的な登用試験とは明らかに異なっていますし、正直に言えば、ま、ま、ごとのようなものかもしれません。けれども、「学問吟味」や「素読吟味」では褒美が下され、それは幕吏として任用されるさいの履歴に記すことができました。武勲ならぬ文勲です。そう考えれば、むしろあからさまな官吏登用試験でないほうが、武士たちの感覚にはよく適合したとも言えるのです。

18 もう一つ、教化のための儒学はまず修身に始まるわけですが、それが治国・平天下に連なっていることも、確認しておきましょう。つまり、統治への意識ということです。士大夫の自己認識の重要な側面がここにあることは、言うまでもありません。武將とその家来たちもまた、その意識を分かちもつことで、士となったのです。経世の志と言い換えることもできるでしょう。〔修身・齐家・治国・平天下〕とは、四書の一つ『大学』の八条目のうち、後半の四つです。『大学』は朱子学入門のテキストとして重んじられ、倫理の基本でもありました。

19 細かく言えば、八条目の前半、「格物・致知・誠意・正心」との思想的連関はどうか、とか、昌平しやうへいや藩校でのむやみな政談ははつと法度だったのではないか、とか、いくらでも議論や検証を行う余地があります。単純に統治意識の一語ですませられないところがあるのは事実です。近世の思想史をていねいに見ようとすれば、右の捉え方は、ややおおづかみに過ぎるかも知れません。

20 しかし当の学生たちにとってみれば、漢文で読み書きするという世界がまず目の前にあり、そこには日常の言語とは異なる文脈があつたことこそが重要なのです。そしてそれは、道理と天下を語ることばとしてあつたのです。D 漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負つてしまうことでもあつたのです。

(齋藤希史『漢文脈と近代日本』による)

(注) 1 孝経——儒教の基本文献の一つ。

2 異学の禁——「寛政異学の禁」のこと。寛政の改革の一環として、一七九〇(寛政二)年以降実施された、幕府の教学政策。儒教の学説の一つである朱子学を正統の学問とし、それ以外の学説を幕府の儒者が講じることを禁じた。中国に範をとって「学問吟味」と「素読吟味」という試験制度が設けられ、幕府直轄の学問所(昌平しやうへい坂学問所||昌平しやうへい覺)も正式に定められた。

3 儒者——儒学を学び、修めた人。また儒学を講じる人。儒家。

4 無為自然を説く道家——「無為自然」は、『老子』『莊子』の教えの基本理念で、人為を排し、自然の理法に従って生きること。「道家」は『老子』『莊子』の学説を奉じる人。

5 隠逸——無為自然の理念のもと、俗世を離れて暮らすこと。

6 詩経——経書の一つ。古代中国の殷・西周から春秋時代にかけての詩三〇五編を収める。

7 吏僚——役人、官吏。

8 佐藤一斎——一七七二年〜一八五九年。大学者として知られ、一八四一年には昌平覺の教授となった。

9 幕吏——江戸幕府の役人。

10 修身——代表的な経書である『大学』で説かれている八つの項目の一つ。自分の行いを律し、我が身を正しく保つこと。人を治める（齊家・治国・平天下）にあたっての根本に位置づけられる。なお、「齊家」は家を正しくととのえること、「治国」は国を正しく治めること、「平天下」は天下すなわち世の中を平穩に保つこと。

11 経世——世の中を治めること。

12 格物・致知・誠意・正心——「修身」に先立つとされる、物事の理解や心構え。

問 1

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1
5

(ア)

ボウヨミ

1

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 生活がキュウボウする
お調子者にツウボウを食らわす
人口のボウチョウを抑える政策
ムボウな計画を批判する
国家のソンボウにかかわる

(イ)

シめる

2

- ⑤ ④ ③ ② ①
- センバクな言動に閉口する
新人選手がセンブウを巻き起こす
建物が違法にセンキョされる
法廷で刑がセンコクされる
センザイ的な需要を掘り起こす

(ウ)

ゲンコウ

3

- ⑤ ④ ③ ② ①
- つまらないことにコウデイする
彼の意見にはシュコウできない
出来のコウセツは問わない
コウザイ相半ばする
ごつごつしてセイコウな文章

(エ)

ヨウイ

4

- ⑤ ④ ③ ② ①
- 事のケイイを説明する
カンイな手続きで済ませる
イサンを相続する
イダイな人物の伝記
イサイは面談で伝える

(オ)

ケイキ

5

- ⑤ ④ ③ ② ①
- ケイコウとなるも午後となるなかれ
リサイクル活動をケイハツする
これまでのケイヤクを見直す
豊かな自然のオンケイを受ける
経済の動向にケイショウを鳴らす

問2

傍線部A「もう少し広く考えてみましょう。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

。

- ① 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に見られる思想と文学の共通点を考慮に入れることで、近世後期の日本において漢籍が知的世界の基礎になった根拠が把握できるから。
- ② 中国に目を転じて時代をさかのぼり、科挙を例に学問の制度化の歴史的起源に関する議論を展開することで、近世後期の日本において漢学が素養として公的に認知された理由が把握できるから。
- ③ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、儒家だけでなく道家の思想も士大夫階級に受け入れられた状況を踏まえることで、近世後期の日本において漢文学習により知的世界が多様化した前提が把握できるから。
- ④ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文と士大夫階級の意識との関係を考察することで、近世後期の日本において漢文学習を通して思考や感覚の型が形成された過程が把握できるから。
- ⑤ 中国に目を転じて時代をさかのぼり、中国古典文に示された民情への視線を分析することで、近世後期の日本において漢学の専門家以外にも漢文学習が広まった背景が把握できるから。

問3

傍線部B「人がことばを得、ことばが人を得て、その世界は拡大します」とあるが、中国では具体的にどのような展開があったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 7。

- ① 無為自然を説く道家のことばに導かれ、上昇志向を捨てた人々がいる一方で、身分秩序を説く中国古典文が社会規範として広く支持されるにつれて、リテラシーの程度によって階層を明確に区分する社会体制が浸透していった。
- ② 中国古典文の素養が士大夫にとって不可欠になると、リテラシーの獲得に対する人々の意欲が高まるとともに、中国古典文が書きことばの規範となり、やがてその規範に基づく科挙制度を通して統治システムが行き渡っていった。
- ③ 高度な教養を持つ士大夫がそのリテラシーによって中国古典文の世界を支えるようになると、その世界で重視された儒家の教えが社会規範として流布し、結果的に伝統的な身分秩序を固定化する体制が各地に形成されていった。
- ④ 中国古典文のリテラシーを獲得した人々が自由に自らの志や情を詩にするようになると、支配階層である士人が編む経書の中にも民情を取り入れたものが出現し、科挙制度のもとで確立した身分秩序が流動化していった。
- ⑤ 中国古典文のリテラシーを重視する科挙が導入され、古典詩文への関心が共有されるようになると、士大夫が堅持してきた書きことばの規範が大衆化し、人々を統治するシステム全体の変容につながっていった。

問 4

傍線部C「刀は、武勇でなく忠義の象徴となる」とあるが、それによって近世後期の武士はどういうことが可能になったのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 8。

- ① 近世後期の武士は、刀が持つ武芸の力を忠義の精神の現れと価値づけることで、理想とする中国の士大夫階級の単なる模倣ではない、日本独自の文と武に関する理念を打ち出すことができるようになった。
- ② 近世後期の武士は、単なる武芸の道具であった刀を、漢文学習によって得られた吏僚としての資格と、武士に必須な忠義心とを象徴するものと見なすことで、学問への励みにすることができるようになった。
- ③ 近世後期の武士は、刀を持つことが本来意味していた忠義の精神の中に、武芸を支える胆力と、漢文学習によって獲得した知力とを加えることで、吏僚としての武士の新たな価値を発見できるようになった。
- ④ 近世後期の武士は、武芸の典型としての刀を忠義の精神の現れと見なし、その精神を吏僚として要求される行政能力の土台と位置づけることで、学問につとめる自らの生き方を正当化できるようになった。
- ⑤ 近世後期の武士は、常に刀を携えることで、統治のためには忠義で結ばれた関係が最も重要であることを自覚し、出世のための学問を重んじる風潮に流されず、精神の修養に専念できるようになった。

問5

傍線部D「漢文で読み書きすることは、道理と天下を背負ってしまふことでもあった」とあるが、それはどういうことか。

本文全体の内容に照らして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 9。

- ① 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策を推進する者に求められる技能を会得するとともに、中国の科挙制度が形成した士人意識と同様のエリートとしての内面性を備えるようになったということ。
- ② 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、行政能力としての文と忠義の心としての武とを個々の内面において調和させるとともに、幕吏として登用されるために不可欠な資格を獲得するようになったということ。
- ③ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、身を立てるのに必要な知識を獲得するとともに、士人としての思考や心の構えをおのずから身に付け、幕藩体制下の統治者としてのあり方を体得するようになったということ。
- ④ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、幕府の教化政策の根幹に据えられている修身を実践するとともに、士人としての生き方を超えた、人としての生き方になう経世の志を明確に自覚するようになったということ。
- ⑤ 武士の子弟たちは、漢文を学ぶことを通して、中国の士人が継承してきた伝統的な思考法に感化されるとともに、それに基づき国家を統治するという役割を天命として引き受ける気になったということ。

問 6 この文章の表現と構成について、次の(i)・(ii)の問いに答えよ。

(i) この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 解答番号は

10。

① ある程度の長さの段落と段落の間に、第2、第5、第9段落のように、読み手に問いかけるような、一文のみから成る短い段落をはさむことにより、論理の展開に緩急のリズムが付き、読み進めやすくなっている。

② 「やや極端な言い方ですが」(第1段落)、「逆に言えば」(第6段落)、「正直に言えば」(第17段落)などの表現により、それぞれの前の部分と、それに続く部分との関係があらかじめ示され、内容が読み取りやすくなっている。

③ 第1、第3、第4、第7段落などにおいて、その最後の文が「のです」という文末表現で終わることにより、それぞれそこまでの内容についての確認・念押しが行われ、次の話題に移ることが明らかになっている。

④ 「です・ます」という優しい調子の書き方の中に、「漢籍を待たずとも」(第4段落)、「文武両道なるものは」(第15段落)などの学術的な言い回しも交えることにより、内容に見合う観念的なスタイルが確保されている。

(ii) この文章の構成に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

① 第1段落～第4段落に示された全体の骨子について、第5段落～第10段落と、第11段落～第20段落との二つの部分が、それぞれの観点から具体的に説明するという構成になっている。

② 第1段落～第2段落が前置き部分に相当し、第3段落～第16段落が中心部分となり、それに対して、第17段落～第20段落が補足部分という構成になっている。

③ 第1段落～第10段落と、第11段落～第20段落という、大きく二つの部分に分けられ、同一の話題に対して、前半が概略的な説明部分、後半が詳細な説明部分という構成になっている。

④ 第1段落～第2段落、第3段落～第11段落、第12段落～第19段落、そして第20段落という四つの部分が、起承転結という関係で結びつく構成になっている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第2問

次の文章は、岡本かの子の小説「快走」の全文である。これを読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、本文の上の数字は行数を示す。(配点 50)

中(なか)の間(ま)で道子(みちこ)は弟の準二(じゅんじ)の正月(しょうげつ)着物(ちゃくぶつ)を縫(ぬい)い終(お)つて、今度は兄(あに)の陸郎(りくろう)の分(ぶん)を縫(ぬい)いかけていた。

「それおやじのかい」

離(はな)れから廊下(りやうか)を歩(あ)いて来(き)た陸郎(りくろう)は、通(と)りすがりにちらと横目(よこめ)に見(み)て訊(き)いた。

「兄(あに)さんのよ。これから兄(あに)さんも会社(かいしゃ)以外(いそ)はなるべく和服(わふく)で済(す)ますのよ」

道子(みちこ)は顔(かお)も上げないで、忙(いそ)がしそくに縫(ぬい)い進(すす)みながら言(い)った。

(注1)「国策(こくさく)の線(せん)に添(そ)ってというのだね」

「だから、着物(ちゃくぶつ)の縫(ぬい)い直(なお)しや新調(しんてう)にこの頃(ころ)は一日(いちにち)中大変(ちやうだいへん)よ」

「はははははは、一人(ひとり)で忙(いそ)がしがつてら、だがね、断(ことわ)って置(お)くが、銀(ぎん)ぶらなぞに出(で)かけるとき、俺(おれ)は和服(わふく)なんか着(き)ないよ」

そう言(い)ってさつさと廊下(りやうか)を歩(あ)いて行(い)く兄(あに)の後姿(こうそ)を、道子(みちこ)は顔(かお)を上げてじつと見(み)ていたが、A ほーっと吐息(とそ)をついて縫(ぬい)い物(もの)を

畳(たたみ)の上に置(お)いた。すると急に屈托(くたく)して来(き)て、大きな脊(せ)伸(の)びをした。肩(かた)が凝(こ)って、坐(すわ)り続(つづ)けた両腿(りやうもも)がだるく張(は)った感じ(かんじ)だった。

道子(みちこ)は立上(たちあ)って廊下(りやうか)を歩(あ)き出(で)した。そのまま玄関(げんかん)で下駄(げた)を履(は)くと、冬晴(ふゆは)れの午後(ごご)の戸外(こがい)へ出(で)てみ(み)た。

陽(ひ)は既に西(にし)に遠退(ととお)いて、西(にし)の空(そら)を薄桃色(はくとうしき)に燃(も)え立(た)たせ、眼(め)の前(まへ)のまばらに立(た)つ住宅(たけ)は影絵(えいゑ)のように黝(くろ)ずんで見(み)えていた。道子(みちこ)は光(ひか)りを求(もと)めて進(すす)むように、住宅街(たけやちがい)を突(つ)切(き)って空(そら)の開(ひら)けた多摩川(たまがわ)脇(わき)の草原(くさげん)に出(で)た。一面(いちめん)に燃(も)えた雑草(ざくそう)の中に立(た)って、思(おも)い切(き)り

手(て)を振(ふ)った。

15

冬(ふゆ)の陽(ひ)はみるみるうちに西(にし)に沈(しず)んで、桃色(はくとうしき)の西(にし)の端(は)れに、藍色(あいじろ)の山脈(さんみゃく)の峰(たけ)を浮(う)き上(あ)がらせた。秩父(ちちぶ)の連山(れんざん)だ！ 道子(みちこ)はこ(こ)うい(い)う

夕景(ゆふけい)色(しき)をゆ(ゆ)つくり眺(なが)めたのは今春(こんしゅ)女学校(にょがっこう)を卒業(そつぎやく)してから一度(いちど)もなかつたよ(よ)うな気(き)がした。あ(あ)わただしい、始(はじ)終(しゅう)追(お)いつめられて、

縮(ちぢ)こまつた生活(せいかつ)ばかりして来(き)たという感(かん)じが道子(みちこ)を不(ふ)満(まん)にした。

20 ひとつと大きな吐息をまたついて、彼女は堤防の方に向つて歩き出した。冷たい風が吹き始めた。彼女は勢い足に力を入れて草を踏みにじつて進んだ。道子が堤防の上に立ったときは、輝いていた西の空は白く濁つて、西の川上から川霧と一緒に夕靄が迫つて来た。東の空には満月に近い月が青白い光りを(ア)刻々に増して来て、幅三尺の堤防の上を真白な坦道(注8)のように目立たせた。道子は急に総毛立ったので、身体をぶるぶる震わせながら堤防の上を歩き出した。途中、振り返っていると住宅街の窓々には小さく電灯がともつて、人の影も定かではなかった。ましてその向うの表通りはただ一列の明りの線となつて、川下の橋に連なっている。

25 誰も見る人がない……よし……思い切り手足を動かしてやろう……道子は心の中で呟いた。膝を高く折り曲げて足踏みをしながらか腕を前後に大きく振つた。それから下駄を脱いで駆け出してみた。女学校在学中ランニングの選手だった当時の意気込みが全身に湧き上つて来た。道子は着物の裾を端折つて堤防の上を駆けた。髪はほどけて肩に振りかかった。ともすれば堤防の上から足を踏み外しはしないかと思うほどまっしぐらに駆けた。もとの下駄を脱いだところへ駆け戻つて来ると、さすがに身体全体に汗が流れ息が切れた。胸の中では心臓が激しく衝ち続けた。その心臓の鼓動と一緒に全身の筋肉がびくびくふるえた。——ほんとうに潑刺(注9)と活きている感じがする。女学校にいた頃はこれほど感じなかったのに。毎日窮屈な仕事に圧えつけられて暮していると、こんな駆足(注10)ぐらいでもこうまで活きている感じが珍らしく感じられるものか。いつそ毎日やつたら——

30 道子は髪を束ねながら急ぎ足で家に帰つて来た。彼女はこの計画を家の者に話さなかった。両親はきつと差止めるように思われたし、兄弟は親し過ぎて揶揄(注11)うづぐらいのものであろうから。いやそれよりも彼女は月明の中に疾駆する興奮した気持ちを自分独りで内密に味わいたかつたから。

35 翌日道子はアンダーシャツに(注12)パンツを穿き、その上に着物を着て隠し、汚れ足袋も新聞紙にくるんで家を出ようとした。

「どこへ行くんです、この忙がしいのに。それに夕飯時じゃありませんか」
母親の声は鋭かった。道子は(イ)腰を折られて引返した。夕食を兄弟と一緒に済ました後でも、道子は昨晚の駆足の快感が忘

れられなかった。外出する口実はないかと頻りに考えていた。

「ちよつと銭湯に行つて来ます」

40

道子の思いつきは至極当然のことにように家の者に聞き流された。道子は急いで石鹼と手拭と湯銭を持つて表へ出た。彼女は着物の裾を蹴つて一散に堤防へ駆けて行つた。冷たい風が耳に痛かつた。堤防の上で、さつと着物を脱ぐと手拭でうしろ鉢巻をした。凜々しい女流選手の姿だった。足袋を履くのもどかしげに足踏みの稽古から駆足のスタートにかかつた。爪先立つて身をかがめると、冷たいコンクリートの上に手を触れた。オン・ユアー・マーク、ゲットセツ、道子は弾条仕掛のように飛び出した。昨日の如く青白い月光に照らし出された堤防の上を、遙かに下を多摩川が銀色に光つて涼々と音を立てて流れている。

45

次第に脚の疲れを覚えて速力を緩めたとき、道子は月の光りのためか一種悲壮な気分に衝たれた——自分はいま潑刺と生きてはいるが、違つた世界に生きているという感じがした。人類とは離れた、淋しいがしかも厳肅な世界に生きているという感じだった。

50

道子は着物を着て小走りに表通りのお湯屋へ来た。湯につかつて汗を流すとき、初めてまたもとの人間界に立ち戻つた気がした。道子は自分独特の生き方を発見した興奮に **B** わくわくして肌を強くこすつた。

家に帰つて茶の間に行くと、母親が不審そうな顔をして

「お湯から何処へまわつたの」と訊いた。道子は

「お湯にゆつくり入つてたの。肩の凝りをほこすために」
(注13)

55

傍で新聞を読んでいた兄の陸郎はこれを聞いて「おばあさんのようなことをいう」と言つて笑つた。道子は黙つて中の間へ去つた。

道子はその翌晩から出来るだけ素早くランニングを済まし、お湯屋に駆けつけて汗もぎつと流しただけで帰ることにした。だ

が母親は娘の長湯を気にしていた。ある晩、道子がお湯に出かけた直後

「陸郎さん、お前、直ぐ道子の後をつけてみて呉れない。それから出来たら待つて帰るところもね」

と母親は頼んだ。陸郎は妹の後をつけるということが親し過ぎるだけに妙に照れくさかった。「こんな寒い晩にかい」彼は別な言葉で言い現しながら、母親のせき立てるのもかまわず、ゆっくりマントを着て帽子をかぶって出て行った。陸郎はなかなか帰って来なかった。母親はじりじりして待つていた。そのうちに道子が帰って来てしまった。

「また例の通り長湯ですね。そんなに叮嚀に洗うなら一日置きだってもいいでしょう」

「でもお湯に行くと足がほてって、よく眠れますもの」

兎も角、眠れることは事実だったので、道子は真剣になつて言えた。母親は

「明日は日曜でお父様も家においでですから、昼間私と一緒に行きなさい」

と言った。道子は何て親というものはうるさいものだろうと弱つて

「なぜそう私の長湯が気になるの。眠る前に行く方がいいけれど、それじゃ明日は昼間行きましょう」

道子は一日ぐらいいは我慢しようと諦めた。それが丁度翌日は雨降りになった。道子は降り続く雨を眺めて——この天気、
(注14) 天祐(てんちゆう)つていうもんかしら………少くとも私の悲観を慰めて呉れたんだから………そう思うと何だか可笑しくなつて独りく

すくす笑った。

お昼過ぎに母親と傘をさして済した顔でお湯に行った。

「そんなに長くお湯につかつてるんじゃないやありませんよ」

母親が呆れて叱つたけれど、道子は自分の長湯を信用させるために顔を真赤にしてまで堪えて、長くお湯につかつていた。
やがて洗し場に出て洗い桶を持って来るときは、お湯に逆上せてふらふらしたが、額を冷水で冷したり、もじもじしているうちに癒った。

「いい加減に出ませんか」

母親は道子のそばへ寄って来て小声で急ぎ立てるので、やっと身体を拭いて着物を着たが、家へ帰るとまた可笑しくなって奥座敷へ行つて独りくすくす笑った。

80 「道子はこの頃変ですよ。毎晩お湯に行きたがつて、行つたが最後一時間半もかかるんですからね。あんまり変ですから今日は私昼間連れて行つてみました」

母親は茶の間で日記を書き込んでいた道子の父親に相談しかけた。

「そしたら」

父親も不審そうな顔を上げて訊いた。

85 「随分長くいたつもりでしたが四十分しかかかりませんもの」

「そりやお湯のほかは何処かへ廻るんじゃないかい」

「ですからゆうべは陸郎に後をつけさせたんですよ。そしたらお湯に入つたというんですがねえ、その陸郎が当てになりませんのよ。様子を見に行つたついでに、友達の家へ寄つて十二時近くまで遊んで来るのですから」

「ふーん」

90 父親はじつと考え込んでしまった。

雨のために響きの悪い玄関のベルがちりと鳴つて止むと、受信箱の中に手紙が落された音がした。母親は早速立つて行つて手紙を持って来たが

「道子宛ての手紙だけです。お友達からですがねえ、この頃の道子の様子では手紙まで気になります。これを一つ中を調べて見ましようか」

95 「そうだね、上手に開けられたらね」

父親も賛成の顔付きだった。母親は長火鉢にかかった鉄瓶の湯気の上に封じ目をかざした。

「すっかり濡れてしまいましたけれど、どうやら開きました」

母親は四つに折った書簡(注17)をそつと抜き出して拵ひろげた。

「声を出して読みなさい」

父親は表情を緊張させた。

勇ましいおたより、学生時代に帰った思いがしました。毎晩パンツ姿も凛々しく月光を浴びて多摩川の堤防の上を疾駆するあなたを考えただけでも胸が躍ります。一度出かけて見たいと思います。それに引きかえこの頃の私はどうでしょう。風邪ばかり引いて、とてもそんな元気が出ません……

「へえ、そりゃほんとうかい」

父親はいつもの慎重な態度も忘れて、頓狂とんきやうな声を出してしまった。

「まあ、あの娘むすめが、何ていう乱暴なことをしてるんでしょう。呼び寄せて叱なぐってやりましょうか」

母親は手紙を持ったまま少し厳しい目付きで立上りかけた。

「まあ待ちなさい。あれとしてはこの寒い冬の晩に、人の目のないところでランニングをするなんて、よくよく屈託くつたくしたからなんだろう。俺だつて毎日遅くまで会社の年末整理に忙殺されてると、何か突飛なことがしたくなるからね。それより俺は、娘の友達が言つてるように、自分の娘が月光の中で走るところを見たくったよ……俺の分身がね、そんなところで走つてるのをね」

「まあ、あんたまで変に好奇心を持ってしまうて。でも万一のことでもあったらどうします」

「そこだよ、場合によつたら弟の準二じゅにを連れて行かせたら」

「そりゃ準二じゅにが可哀かわいそうですわ」

「兎も角、明日月夜だったら道子の様子を見に行く」

「呆れた方ね、そいじゃ私も一緒に行きますわ」

「お前もか」

C 二人は真剣な顔をつき合せて言い合っていたが、急に可笑しくなつて、はははははと笑い出してしまった。二人は明日の月夜が待たれた。

120

道子には友達からの手紙は手渡されなかったし、両親の相談など知るよしもなかった。ただいつも晩飯前に帰らない父親が今日は早目に帰つて来て自分等の食卓に加わったのが氣になった。今晚お湯に行きたいなぞといえは母親と一緒に行くと言うかも知れぬ。弱つた。今日は午前中に雨が上つて、月もやがて出るであろう。この好夜、一晚休んで肉体が待ち兼ねたようにうずいているのに。段々遅くなつて来ると道子はいらして来て遂々母親に言つた。

125

「お湯へやつて下さい。頭が痛いんですから」

母親は別に氣にも止めない振りで答えた。

「いいとも、ゆつくり行つてらっしゃい」

道子は(ウ)われ知らず顔をほころばした。こんなことであるかしらん——道子は夢のような氣がした。夢なら醒めないうちにと手早く身支度をし終つて表へ出た。寒風の中を一散に堤防目がけて走つた。——今夜は二日分、往復四回駆けてやる——

130

道子は堤防の上に駆け上つて着物を脱いだ。青白い月の光が彼女の白いアンダー・シャツを銀色に光らせ、腰から下は黒のパンツに切れて宙に浮んだ空想の胸像の如く見えた。彼女は先ず腕を自由に振り動かし、足を踏んで体ならしを済ました。それからスタートの準備もせずに、いきなり弾丸のように川上へ向つて疾走した。やがて遙かの向うでターンしてまた元のところへ駆け戻つて来た。そこで狭い堤防上でまたくるとターンすると再び川上へ向つて駆けて行つた。

このとき後から追っかけて来た父親は草原の中に立つて遙かに堤防の上を白い塊が飛ぶのを望んだ。

135

「あれだ、あれだ」

父親は指さしながら後を振り返って、ずっと後れて駈けて来る妻をもどかしがった。妻は、はあはあ言いながら

「あなただったら、まるで青年のように走るんですもの、追いつけやしませんわ」

妻のこの言葉に夫は得意になり

「それにしてもお前の遅いことつたら」

妻は息をついで

「それでも一生懸命だもんで、家からここまで一度も休まずに駈けて来たんですからね」

「俺達は案外まだ若いんだね」

「おほほほほほほほほほ」

「あはははははははははは」

二人は月光の下を寒風を切つて走つたことが近来にない喜びだった。

D 二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合つた。

(注) 1 国策——国家の政策。この小説が発表された昭和二三(一九三八)年前後の日本では、国家総動員法が制定されるなど国民生活に様々な統制が加えられた。

2 銀座——東京の繁華街銀座通りをぶらぶら散歩すること。

3 屈託——「屈託」に同じ。

4 多摩川——山梨県に発し、南東へ流れて東京湾に注ぐ川。

5 秩父の連山——東京、埼玉、群馬、山梨、長野の都県境にまたがる山地。秩父は埼玉県西部の地名。

6 女学校——旧制の高等女学校の略。

7 幅三尺——一尺は約三〇・三センチメートル。

8
坦道——平坦な道。

- 9 パンツ——運動用のズボン。
- 10 湯銭——入浴代のお金。
- 11 オン・ユア・マーク、ゲットセツ——競走のスタートの際のかけ声。
- 12 涼々——よどみなく水の流れるさま。
- 13 ほごす——「ほぐす」に同じ。
- 14 天祐——天のたすけ。
- 15 長火鉢——長方形の箱火鉢。火鉢は、手先を暖めたり湯を沸かしたりするために炭火を入れる調度。
- 16 鉄瓶——湯を沸かす鉄製の容器。
- 17 書簡箋——手紙を書く用紙。便箋。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 12 14。

- (ア) 12 刻々に
- | | | | | |
|-------|-------|-------|---------|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 次第次第に | ときどきに | 順番通りに | あっという間に | 突然に |

- (イ) 腰を折られて
- | | | | | |
|--------|----------|---------|-----------|---------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 屈辱を感じて | 途中で妨げられて | やる気を失って | 思わぬことに驚いて | 下手に出られて |

- (ウ) われ知らず 14
- | | | | | |
|------------|-----------|--------------|-------------|------------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 他人の視線を意識して | 本当の思いとは逆に | 人には気づかれないように | あれこれと迷うことなく | 自分では意識しないで |

問2

傍線部A「ほーつと吐息をついて縫い物を畳の上に置いた」とあるが、このときの道子の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

15。

- ① 家族のための仕事をひたすらこなすよう強いられているにもかかわらず、兄にその辛い状況を理解してもらえず、孤独を感じている。
- ② 家族のための仕事を精一杯こなしていたつもりが、その仕事の使命感に酔っていると兄に指摘され、恥ずかしさにとたまれなくなっている。
- ③ 家族のための仕事に精一杯取り組んできたのに、その苦心が兄には真剣に受け止められていないことに気づき、張りつめた気持ちが緩んでいる。
- ④ 家族のための仕事は正しいものであると信じてきたので、その重要性を理解しようとしないう兄に対して、憤りを抑えがたくなっている。
- ⑤ 家族のための仕事が自分には楽しいものとは思えないうえ、兄に冷やかされながらその仕事を続けなければならないので、投げやりな気分になっている。

問3

傍線部B「わくわくして肌を強くこすった」とあるが、この様子からうかがえる道子の内面の動きはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

16。

- ① 月光に照らされて厳かな雰囲気の中を「走る」うちに、身が引き締まるような思いを抱くとともに自分の行為の正しさを再認識し、その自信を得たことで胸の高鳴りを抑えきれずにいる。
- ② 月光に照らされた堤防を人目につかないように「走る」うちに、非常時では世間から非難されるかもしれないことに密かな喜びを感じ始め、その興奮を自分一人のものとしてかみしめようとしている。
- ③ 月光に照らされて「走る」という行為によって、まるで女学校時代に戻ったような気持ちになり、窮屈に感じていた生活が変わるかもしれないという明るい予感を繰り返し味わっている。
- ④ 月光の下を一人で「走る」という行為によって、社会や家族の一員としての役割意識から逃れた別の世界を見つけられたことに胸を躍らせ、その発見をあらためて実感しようとしている。
- ⑤ 月光の下を一人で「走る」という行為によって、他者とかかわりを持てないことの寂しさを強く実感しつつも、社会や家庭の中で役割を持つ自分の存在を感覚的に確かめようとしている。

問 4

本文 90 行目までで、陸郎と道子とはお互いをどのように意識し合う関係として描かれているか。その説明として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① 陸郎は誠実な道子の性格をいとおしく感じており、その妹の後をつけてほしいという母親に反発を覚えている。一方、道子は自分の発見した喜びを兄に伝えても、照れ隠しから冗談めかして受け流されるだろうと予感している。二人は表には出さないが心の底では信頼し合っている。

② 陸郎は道子を妹として大切に思っているが照れ隠しから突き放すような接し方になり、妹の面倒を見てほしいと母親に頼まれても素直に従えない。一方、道子も奔放な陸郎への憧れを率直に表現できず、共感してもらえそうな話題も伝えないでいる。二人は年ごろの兄妹らしい恥じらいと戸惑いを感じている。

③ 陸郎はきまじめな道子を気安く冷やかしたりもするが、その妹の後をつけてほしいという母親の指図には素直に応じる気にはならない。一方、道子も走ることで感じる喜びを親し過ぎる兄に伝えてからかわれるより、その興奮を自分だけで味わおうとしている。二人は近しさゆえにかえって一定の距離を保っている。

④ 陸郎は内心では道子が融通の利かない性格だと思っている、母親の言うように妹の後をつけたところで何の意味もないと感じている。一方、道子は陸郎の奔放な性格をうらやましく感じるが、自分の発見した喜びを伝えて興奮を共有したいとは思えないでいる。二人はそれぞれの性格を熟知しているためにかえってぎこちなくなっている。

⑤ 陸郎は道子の大人びた振る舞いを兄として信頼しており、心の中では妹の面倒を見てほしいという母親の頼みは的外れだと感じている。一方、道子はこだわりのない兄の態度に親しみを感じており、あえて自分の発見を伝えなくても兄には理解してもらええると思っている。二人は言葉にしくなくとも共感し合える強い絆^{きずな}で結ばれている。

問5

傍線部C「二人は真剣な顔をつき合せて言い合っていたが、急に可笑しくなつて、はははははと笑い出してしまった。」と、傍線部D「二人は娘のことも忘れて、声を立てて笑い合った。」の、それぞれの笑いの説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

18

① 傍線部Cでは、隠し事をする娘の様子を心配し監視しようとしていたはずの二人が、娘の走る姿を見に出かけるという行為に魅力を感じ始めたことにおかしさを抑えきれないでいる。傍線部Dでは、娘を保護すべき親としての立場を離れ、夜道を全力で走ったことによる充実感を彼ら自身の喜びとして感じ笑い合っている。

② 傍線部Cでは、娘が自分たちにうそをついていることを二人で心配していたが、たかだかランニング程度にあまりに深刻になっていたと気がつきおかしさをこらえられないでいる。傍線部Dでは、日頃から世間の批判ばかり気にして、無理に縮こまった生活を送っていた自分たちの勇気のなさを互いに笑い飛ばそうとしている。

③ 傍線部Cでは、娘への不信感から手紙を盗み見るという行為にまで及んだ二人が、余計な取り越し苦労をしたことに気がつき苦笑し合っている。傍線部Dでは、夜の堤防の上を疾走する娘を心配のあまり追うことさえたが、そこまで娘を心配した互いの必死さにあきれてそれを笑い飛ばそうとしている。

④ 傍線部Cでは、いつまでも娘や息子を子ども扱いしている自分たちに気がつき、保護者としての互いの思い入れの強さに苦笑し合っている。傍線部Dでは、自分たち自身が道子と同じように夜道を全力で走ったことではじめて娘の気持ち可以理解できたことを喜び、それを互いに確かめ合うように笑い合っている。

⑤ 傍線部Cでは、本音では娘の行動に興味をそそられながら、それを隠そうとして娘を諭す親としての建て前を互いに言い募っていたことにおかしさを抑えられないでいる。傍線部Dでは、家で仕事に追われている様子とは違って生き生きした娘の姿から、暗い世相の中に明るい未来を予感し笑い合っている。

問 6

この文章は、第一場面（1行～47行）、第二場面（49行～55行）、第三場面（57行～119行）、第四場面（121行～145行）の四つに分けられる。四つの場面の表現に関する説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① 第一場面では、母親の心情が37行目の「母親の声は鋭かった。」のように外部の視点から説明されているが、道子の心情は24行目の「よし………思い切り手足を動かしてやろう」のように、内心のつぶやきのみで説明されている。
- ② 第二場面では、母親の問いかけに対し、道子が倒置法の返答をしている。この不自然な返答とその直後の兄の誇張した言い回しが母親の不審を呼び、第三場面で以降の話が急展開する。
- ③ 第三場面後半の父親と母親の会話には「まあ」という言葉が三回出てくる。この三つの「まあ」はその直後の読点の有無に違いがあり、読点のあるものは驚きの気持ちを表し、読点のないものはあきれた気持ちを表している。
- ④ 第一場面終わりと第四場面半ばの道子が堤防を走るシーンは、勢いよく走り出す様子を描くのに直喩（ちよくゆ）を用いたり、情景を描くのに色彩表現を用いたりして、イメージ豊かに表現されている。
- ⑤ 5行目までの兄との会話に見られるように、道子の台詞は、四つの場面を通じて、家族からの問いへの応答から始まっている。これは家族とかかわり合いを持つことについて、道子が消極的であることを表している。
- ⑥ 第一場面から道子に焦点を当てて描かれていた話が、第三場面途中から夫婦に焦点を当てて描かれ始める。このことは、第四場面終わりで、両親を示す表現が「父親」「母親」から「夫」「妻」へ変化することではっきり示されている。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第3問

次の文章は『源氏物語』（夕霧の巻）の一節である。三条殿（通称「雲居雁」）の夫である大将殿（通称「夕霧」）は、妻子を愛する実直な人物で知られていたが、別の女性（通称「落葉宮」）に心奪われ、その女性の意に反して、深い仲となってしまった。以下は、これまでにない夫の振る舞いに衝撃を受けた三条殿が、子どもたちのうち、姫君たちと幼い弟妹たちを連れて、実家へ帰る場面から始まる。これを読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点 50）

三条殿、「限りなめり」と、『さしもやは』とこそ、かつは頼みつれ、『まめ人の心変はるは名残なくむ』と聞きしは、まことなりけり」と、世を試みつる心地して、『ア』いかさまにしてこのなめげさを見じ』と思しければ、大殿へ「方違へむ」とて渡り給ひにけるを、女御の里におはするほどなどに対面し給うて、少しもの思ひ晴るどころに思されて、例のやうにも急ぎ渡り給はず。

大将殿も聞き給ひて、「さればよ、いと急にものし給ふ本性なり。このおとども、はた、おとなおとなしうのどめたるところさすがになく、いとひききりに、はなやい給へる人々にて、『めざまし、見じ、聞かじ』など、ひがひがしきことどもし出で給うつべき」と、驚かれ給うて、三条殿に渡り給へれば、君たちも片へはとまり給へれば、姫君たち、さてはいと幼きとをぞ率ておはしにける、見つけて喜び睦れ、あるは上を恋ひ奉りて愁へ泣き給ふを、X「心苦し」と思す。

消息たびたび聞こえて、迎へに奉れ給へど、御返りだになし。「かくかたくなしう軽々しの世や」と、ものしうおぼえ給へど、おとどの見聞き給はむところもあれば、暮らしてみづから参り給へり。「寝殿になむおはする」とて、例の渡り給ふ方は、御達のみさぶらふ。若君たちぞ乳母に添ひておはしける。

A「今さらに若々しの御まじらひや。かかる人を、ここかしこに落とし置き給ひて、など寝殿の御まじらひは。ふさはしからぬ御心の筋とは年ごろ見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひ聞こえて、今はかくくたくだしき人の数々あはれるを、『かたみに見棄つべきにやは』と頼み聞こえける。はかなき一ふしに、かうはもてなし給ふべくや」と、いみじうあはめ恨み申し給へば、

B 「何ごとも、『今は』と見飽き給ひにける身なれば、今、はた、直るべきにもあらぬを、『何かは』とて。あやしき人々は、思し棄てずは嬉しうこそはあらめ」

と聞こえ給へり。

C 「なだらかの御答へや。言ひもていけば、誰が名か惜しき」
とて、強ひて「渡り給へ」ともなくて、その夜は独り臥し給へり。

「あやしう中空なるころかな」と思ひつつ、君たちを前に臥せ給ひて、かしこに、また、いかに思し乱らんさま思ひやり聞こえ、やすからぬ心づくしなれば、「いかなる人、かうやうなること、をかしうおぼゆらん」など、
Y 物の懲りしぬべうおぼえ給ふ。

明けぬれば、「人の見聞かむも若々しきを、『限り』とのたまひはてば、さて試みむ。
(注13) かしこなる人々も、
(イ) らうたげに恋ひ聞こゆめりしを、選り残し給へる、『様あらむ』とは見ながら、思ひ棄てがたきを、ともかくもてなし侍りなむ」と、威し聞こえ給へば、「すがすがしき御心にて、この君たちをさへや、知らぬ所に率て渡し給はん」と、あやふし。

姫君を、
(ウ) いざ、給へかし。見奉りにかく参り来ることとはしたなければ、常にも参り来じ。かしこにも人々のらうたきを、同じ所にてだに見奉らん」と聞こえ給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす、「いとあはれ」と見奉り給ひて、「母君の御教へにな叶ひ給うそ。いと心憂く、思ひとる方なき心あるは、いと悪しきわざなり」と、言ひ知ら
d せ奉り給ふ。

(注) 1 大殿——三条殿の父(本文では「おとど」)の邸宅。

2 女御——三条殿の姉妹。入内して宮中に住むが、このとき、里下がりして実家(大殿)にいた。

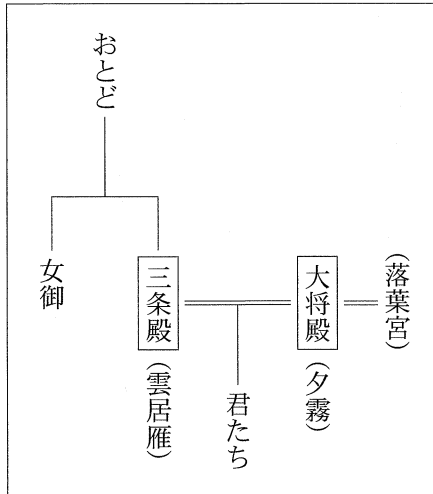
3 おとど——三条殿の父。

4 いとひききりに——ひどくせつかちで。

5 はなやい給へる人々——派手にふるまって事を荒立てなさる人たち。「はなやい」は「はなやぎ」のイ音便。

- 6 三条殿——ここでは大将殿夫妻の邸宅を指す。
- 7 君たち——大将殿と三条殿の子どもたち。
- 8 上——三条殿。
- 9 寢殿——寢殿造りの中央の建物。女御の部屋がある。
- 10 例の渡り給ふ方——三条殿が実家でいつも使っている部屋。
- 11 御達——女房たち。
- 12 中空なる——落葉宮には疎まれ、妻には家出されるといふ、身の置き所のない様。
- 13 かしこなる人々——大将殿夫妻の邸宅(三条殿)に残された年長の息子たち。

人物関係図 主要登場人物は□で囲んだ。()内は通称。



問 1

傍線部(ア)・(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

21

ゝ

23

。

(ア)

いかさまにしてこのなめげさを見じ

21

- ① いかなる手段を用いても私はみじめな目に会うまい
- ② どうすれば私への失礼な態度を見ずにすむだろう
- ③ どうしてこの冷淡な振る舞いを見ていられよう
- ④ だましてでも夫にひどい目を見せずにおくまい
- ⑤ 何としても夫の無礼なしうちを目にするまい

(イ)

らうたげに恋ひ聞こゆめりしを

22

- ① いじらしい様子でお慕い申し上げているようだったが
- ② いじらしいに恋い焦がれているらしいと聞いていたが
- ③ かわいらしげに慕う人の様子を聞いていたようだが
- ④ かわいらしいことに恋しいと申し上げていたようだが
- ⑤ かわいそうなことに恋しくお慕い申し上げているようだったが

(ウ)

いざ、給へかし

23

- ① まあ、あれをご覧なさいよ
- ② まあ、そこにおすわりなさいよ
- ③ まあ、あなたの好きになさいよ
- ④ さあ、こちらへおいでなさいな
- ⑤ さあ、わたしにお渡しなさいな

問2 波線部 a と d の文法的説明の組合せとして正しいものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。 解答番号は

24。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----------|---|--------|---|---------|---|--------|
| ① | a | 断定の助動詞 | b | 受身の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 使役の助動詞 |
| ② | a | 形容動詞の活用語尾 | b | 受身の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 尊敬の助動詞 |
| ③ | a | 断定の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 完了の助動詞 | d | 使役の助動詞 |
| ④ | a | 形容動詞の活用語尾 | b | 自発の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 尊敬の助動詞 |
| ⑤ | a | 断定の助動詞 | b | 自発の助動詞 | c | 動詞の活用語尾 | d | 使役の助動詞 |

問3

傍線部X『心苦し』と思す」とあるが、誰^{だれ}が、どのように思っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～

⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 25。

- ① 三条殿が、姫君と幼い子どもたちを実家に連れてきたものの、両親の不和に動揺する子どもたちを目にして、愚かなことをしたと思っている。
- ② 三条殿が、我が子を家に置いて出てきてしまったものの、子どもたちが母を恋慕って泣いていると耳にして、すまないことをしたと思っている。
- ③ 大将殿が、三条殿にとり残されてしまった我が子の、父の姿を見つけて喜んだり母を求めて泣いたりする様子に心を痛め、かわいそうだと思っている。
- ④ 大将殿が、置き去りにされた子の、母に連れて行かれた姉妹や弟をうらやんで泣く姿を見て、我が子の扱いに差をつける三条殿をひどいと思っている。
- ⑤ 姫君たちが、父母の仲たがいをどうすることもできないまま、母三条殿の実家に連れてこられ、父のもとに残された兄弟たちを気の毒だと思っている。

問 4

傍線部 Y「もの懲りしぬべうおぼえ給ふ」とあるが、このときの大將殿の心情の説明として最も適当なものを、次の ① ～

⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は 26。

- ① 三条殿をずっと実家に居座らせるわけにもいかず、一方でおとなしく自邸に戻りそうにもないので、どうしてこんな女を良いと思ったのかと、三条殿をいまいましく思っている。
- ② 三条殿には出て行かれ、落葉宮は落葉宮で傷ついているだろうと想像されて、心労ばかりがたまるため、恋のやりとりを楽しんでいると思っている人間の気が知れないと、嫌気がさしかけている。
- ③ 眠っている我が子の愛らしさに、この子を残して家を出て行った三条殿の苦悩を思いやって心が痛み、自分はつくづく恋愛には向いていないのだと悟り、自分の行動を反省している。
- ④ 落葉宮と深い仲になったものの、不思議と落葉宮と三条殿との間で心が揺れ、三条殿の乱れる心の内を思うと気持ちが落ち着かず、自分の行動を後悔して、死にそうなほど苦悩している。
- ⑤ 落葉宮を愛していても、三条殿がいる限り先が見えず、落葉宮も現状に悩んでいるかと思うと心穏やかでなく、世間の目も気になって、三条殿との生活が嫌になり、別れたいと望んでいる。

問5

本文中の会話文A～Cに関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

27。

① Aは大将殿の言葉で、三条殿の年がいのなさを責め、多くの子をなすほど深い仲なのに、少しの出来心ぐらいで実家に帰るなんてと非難している。Bは三条殿の言葉で、大将殿のお心が離れた自分は変わりようもなく、何をしようと勝手だ、子どもたちのことは後はよろしくと言っている。

② Aは大将殿の言葉で、子どもたちをほったらかして女御のもとに入り浸っている軽率さをたしなめ、子育ての苦労ぐらいで実家に帰る無責任さを非難している。Bは三条殿の言葉で、浮気者との間の子を育てるのに今は飽き飽きしており、子どもたちはそちらで世話してくださいと言いつ返している。

③ Aは三条殿の言葉で、年がいもなく恋にうつつを抜かして子どもたちのことを忘れていると大将殿をなじり、親のくせに無責任ではないかと非難している。Bは大将殿の言葉で、私の気持ちはもはやもとに戻りそうにないが、子どもたちだけは見捨てずにいてくれれば嬉しいと応じている。

④ Bは三条殿の言葉で、大将殿に愛想を尽かされた自分であるし、今さら性格を直すつもりもない、私のことはともかく、子どもたちだけは面倒を見てほしいと言っている。Cは大将殿の言葉で、三条殿の言い分に理解を示して機嫌をとりつつも、最後には、私の名誉も考えてほしいと頼んでいる。

⑤ Bは三条殿の言葉で、私に飽きたあなたのお気持ちかもはやもとに戻るはずもなく、好きになさればよいが、子どもたちへの責任は負っていただきたいと言っている。Cは大将殿の言葉で、穏やかなお返事ですうねと皮肉をにじませつつ、このままでは、あなたの名折れになるだけだと反論している。

問6

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

28

- ① 三条殿は、心変わりしてしまった大将殿に絶望して実家に戻り、おとどと語ることで、やっと「少しもの思ひ晴るけどころ」を見つけ、もはや大将殿とは暮らせないと、このまま別れる決心をした。
- ② おとどは、三条殿のことを心配して、大将殿に「消息たびたび聞こえたが、大将殿は全く返事をしないので、「かたくなしう軽々しの世や」と、大将という立場にそぐわない軽薄さを不愉快に思った。
- ③ 大将殿は、三条殿の家出を知り、三条殿父娘の短気で派手な性格を考えると、「ひがひがしきこと」をしでかしかねないと感じ、「暮らしてみづから参り給へり」と、すぐさま大殿へ迎えに行った。
- ④ 三条殿は、強気に帰宅を拒みながらも、思い切りのよい「すがすがしき御心」の大将殿ならば、ここにいる子どもたちまでも自分の手の届かない場所に連れて行ってしまいかねず、「あやふし」と危惧した。
- ⑤ 大将殿は、説得に耳を貸さない頑固な三条殿の手もとで育つことになる姫君の将来を心配して、「母君の御教へにな叶ひ給うそ」などと、せめて教訓を言い聞かせることで、父の役割を果たそうとした。

(下書き用紙)

国語の試験問題は次に続く。

第4問

次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。(設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。)

(配点 50)

江南^(注1)多^シ竹。其^ノ人⁽¹⁾習^レ於^ニ食^ヲ筍^ヲ。每^レ方^ニ春^ノ時^ニ、苞^{ハウ}甲^{カフ}出^デ土^{ヨリ}、頭^(注3)角^{ケン}繭^{ケン}

栗^{リツ}、率^{オホビテ}以^テ供^ス採^ニ食^ニ。或^{イハ}蒸^{ジュウ}淪^{ヤク}以^テ為^シ湯^ト、茹^{ジュ}介^{カイ}茶^{チャ}殍^{セン}以^テ充^{アツ}饋^{キニ}。――好^ヲ事^ニ

者目以清嗜^(注6)不^レ斲^{セツ}方長。故^ニ雖^{イヘドモ}園^(注7)林豊美、複^{フク}垣^{エン}重^{チヨウ}局^{ケイニシテ}、主人^ニ居^{キヨ}^(注8)

嘗^{シヤウ}愛^ス護^{スト}及^ニ其^ノ甘^{シトス}於^ニ食^ヲ之^ヲ也、剪^{セン}伐^{バツ}不^レ顧^ミ。――独^リ其^ノ味^{クシテ}苦^ニ而^レ不^レ入^ラ

食^ニ品^ニ者、筍^{ノミ}常^ニ全^{マツタシ}。――每^{ツネニ}当^{タリテ}溪^ニ谷^ニ巖^{ガン}^(注9)陸^{リク}之^ノ間^ニ、散^{シテ}漫^{シテ}於^ニ地^ニ而^レ不^レ収^{メラレ}

者、必^ズ棄^ス於^ニ――者^ハ也。而^{ルニ}――者^ハ至^ル取^{リテ}之^ヲ或^{イハ}尽^{クスニ}其^ノ類^ヲ。然^{ラバ}――者^ハ近^シ自^ラ

戕^{ソコナ}而^{ルニ}――者^ハ雖^モ棄^{テラ}猶^ト免^ニ於^ニ剪^{セツ}伐^{セツ}。――夫^レ物^ノ類^ハ尚^レ甘^{キヲ}而^レ苦^キ者^ハ得^{タリ}全^{キヲ}。――

C
世莫不貴取賤棄也。然亦知取者之不幸、而偶幸於棄者。

D
豈莊子所謂以無用為用者比耶。

(陸樹声『陸文定公集』による)

(注) 1 江南——長江下流の地域。

2 苞甲——タケノコの身を包む一番外側の皮。

3 頭角繭栗——子牛の生えたばかりの角のような形をしたタケノコの若芽。「繭栗」は「まゆ・くり」のような小さな形をいう。

4 蒸濡以為湯——蒸したり煮たりして、スープにすること。

5 茹介茶薺以充饋——「茹介」はタケノコの穂先の柔らかい皮、「茶薺」は茶。それらを食卓にならべることをいう。「饋」は食事のこと。

6 清嗜——清雅なものへの嗜好。

7 園林豊美、複垣重局——幾重もの垣根や門扉をしつらえた美しい庭園。

8 居嘗——平常。

9 巖陸——山の中。

問 1 傍線部(1)「習」・(2)「尚」の意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は 29 ・ 30 。

(1)

29 「習」

- | | | | | |
|------|---------|------|---------|------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 習練する | 習慣としている | 習得する | 弊習としている | 学習する |

(2)

30 「尚」

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 崇拜する | 保全する | 尊重する | 思慕する | 誇示する |

問2 傍線部A「好事者目以清嗜不斬方長」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 31。

- ① 好事者目_ニ以清嗜_二不_レ斬_レ方長_一
事を好む者以て清嗜_{せいし}なるを目し長きに方_{なら}ぶを斬_とらず
- ② 好事者目_ニ以清嗜_二不_レ斬_レ方長_一
事を好む者目して以て清嗜_{せいし}なるも方_{まさ}に長ずるを斬らず
- ③ 好事者目_下以_ニ清嗜_二不_レ斬_レ方長_一
事を好む者清嗜を以て方に長ずるを斬らずと目す
- ④ 好事者目_ニ以清嗜_二不_レ斬_レ方長_一
事を好む者目は清嗜を以てし長きに方ぶを斬らず
- ⑤ 好事者目_ニ以清嗜_二不_レ斬_レ方長_一
事を好む者目するに清嗜を以てし方に長ずるを斬らず

問3

空欄

I

・

II

・

III

・

IV

に入る語の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号

は
32。

⑤	④	③	②	①
I	I	I	I	I
甘 _キ _ニ	苦 _キ _ニ	苦 _キ _ニ	甘 _キ _ニ	苦 _キ _ニ
II	II	II	II	II
甘 _キ	甘 _キ	苦 _キ	苦 _キ	甘 _キ
III	III	III	III	III
苦 _キ	苦 _キ	甘 _キ	苦 _キ	甘 _キ
IV	IV	IV	IV	IV
甘 _キ	甘 _キ	苦 _キ	甘 _キ	苦 _キ

問 4

傍線部 B「猶免_ニ於剪伐」の解釈として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。解答番号は

- ① きつと切り取られるのを避けるにちがいない
- ② 依然として切り取られることには変わらない
- ③ 切り取られることから逃れようとするだろう
- ④ まだ切り取られずにすんだわけではないのだ
- ⑤ 切り取られずにすんだのと同じようなことだ

33

問5 傍線部C「世莫不貴取賤棄也」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答
番号は 34。

- ① 世に取るを貴び棄つるを賤しまざるは莫し
- ② 世の貴を取り賤を棄てざることを莫かれ
- ③ 世に貴は取られ賤は棄てられざるは莫し
- ④ 世の貴を取らず賤を棄つること莫かれ
- ⑤ 世に貴は取られず賤は棄てらるること莫し

問 6 本文を論旨の展開上、三つの部分に分けるならば、㉗㉘のどこで切れるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

35。

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| ㉗と㉘ | ㉙と㉚ | ㉛と㉜ | ㉝と㉞ | ㉟と㊱ |

問7 傍線部D「豈 莊子 所謂 以 無用 為 用者 比耶」の読み方と筆者の主張の説明として最も適当なものを、次の①、

⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 36。

① この文は、「豈に莊子の所謂以て無用の用を為す者をば比へんや」と訓読し、「これがどうして『莊子』のいわゆる『無用ノ用ヲ為ス』ことに喩えることができようか」と述べる筆者は、この苦いタケノコがたどった運命は、無用のはたらきかけを戒める『莊子』の考え方と正反対のものであったと指摘している。

② この文は、「豈に莊子の所謂無用の用たる者を以て比ふるか」と訓読し、「これこそ『莊子』のいわゆる『無用ノ用タル』ことによつて喩えたものであることよ」と述べる筆者は、この苦いタケノコが、役に立たないことを自覚してこそ世間の役に立つという『莊子』の考え方を体現したものだとなたえている。

③ この文は、「豈に莊子の所謂以て無用の用を為す者の比ひなるか」と訓読し、「これがどうして『莊子』のいわゆる『以テ無用ノ用ヲ為ス』もののたぐいであるだろうか」と述べる筆者は、この事例を根拠に、無用のものを摂取しないことが天寿をまっとうする秘訣だという『莊子』の考え方に反論している。

④ この文は、「豈に莊子の所謂無用を以て用を為す者をば比べんや」と訓読し、「これがどうして『莊子』のいわゆる『無用ヲ以テ用ヲ為ス』ものに比較することができようか」と述べる筆者は、この事例から、無用のようにみえるものこそ役に立つという『莊子』の考え方が見失われがちなことを嘆いている。

⑤ この文は、「豈に莊子の所謂無用を以て用と為す者の比ひなるか」と訓読し、「これこそ『莊子』のいわゆる『無用ヲ以テ用ト為ス』もののたぐいではなからうか」と述べる筆者は、この苦いタケノコのなかに、世間で無用とされるものこそ天寿をまっとうするのだという『莊子』の考え方を見いだしている。